

<p>学科 こどもの生活</p>	<p>氏名 永津 利衣</p>
<p>家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。</p> <p>イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。</p> <p>ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。</p> <p>ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。</p>	
<p>1 教育の責任</p>	
<p>2023年度に家政学部こどもの生活学科へ着任し、3年目となった本年度は、オムニバスを含め合計12科目を担当した。</p> <p>教職必修科目は、幼稚園教諭、小学校教諭、ならびに、中・高(家庭科)、栄養教諭を目指す学生が教職教養や教職における専門的知識・技能を身に着ける授業である。また、保育士必修科目は、保育所保育指針に基づき、保育に関する基礎的・専門的な知識・技能の獲得を目指す授業である。以上の専門的事項に加えて、共生社会の実現に向け、教育者としての姿勢やスキルの形成もめざしている。</p> <p>その他に、就職に向けた指導(面接指導、実技指導[弾き歌い、ピアノ技能、絵本の読み聞かせの表現指導])、学生指導(休・退学希望者への指導、就学継続への意欲向上)、安城学園高校での保育表現講座、バス見学会の講座、岡崎げんき館でのボランティア活動の指導(年間7回)、岡崎げんき館まつり「春のふんわりコンサート(企画・実施)」、矢作南小学校の全校伝統行事「やなんミュージック」を担当した。(添付資料1「シラバス」)</p>	
<p>2 教育の理念と目的</p>	
<p>高校までの“守られる存在”から、“子どもを守り育てる存在”へと転換していく本学家政学部こどもの生活学科での学びにおいて、まず、学生自身がウェルビーイングな存在であることを根底に据えて指導に当たっている。特に本学の学生については自己中心的な考え方から視野を広げ、他者理解を深めていく人間の涵養が重要だと考えている。このような精神的、倫理的な全人的成長は、建学の精神や四大精神につながっていくと共に、共生社会の実現をめざし、インクルーシブ教育へと転換が進む中で、保育者・教育者としての他者に寄り添い、思いやる姿勢や行動を育むことが重要であると考えます。</p> <p>また、AI社会においてより人間らしさが求められる中、AIの活用と共に、個人の表現や創造性、芸術分野の重要性が増している。これからの社会を担っていく学生たちに対し、前述のような青年期の自己形成を人間教育の基盤として、その上に、芸術教科や表現に関する知識・技能の獲得と活用があると考えます。そして、他者との協働を通じて思考力を高め合い、感性を働かせながら多くの経験を積むことで、直感力を養っていくことができると考える。協働と個人、思考力と感、それぞれの両輪をバランスよく駆動させることが求められる。</p> <p>授業では、体験と省察のサイクルを回し、省察を活かした学びを次の体験へとつなげていくように心がけている。このような学修活動を通して、自己と向き合い感受性を高めることや、より良いものを創造するために全体や先を見通して考える思考力、他者を尊重しながら協働し、新たなアイデアを生み出し課題を解決</p>	

していく能力を養うことができると考える。

特に、練習や経験の積み重ねが必要な音楽や表現の技能修得においては、継続的な学修の繰り返しが重要で、粘り強さや忍耐力を養い苦手を克服するチャンスである。練習の過程では楽しさだけでなく、音への集中力やイメージする表現を追求することも求められる。このような学習の積み重ねの中で、個々の感性や音楽的表現を伸ばすとともに、保育者・教員として子どもの日常生活を大切に、子どもの表現を感受する教育者としての視点や姿勢を形成することを目指している。また、思考力を身につけ、獲得した知識・技能を解決に結び付けていく学習を繰り返すことで、社会人として、自分がこれまでに培ってきたこととは異なる多様な考えや価値観を受容し、互いを認めながら振る舞うことができるようになると考えられ、社会に貢献することの喜びを感じられる学生を育てていきたい。

3 教育方法

保育者・教員養成教育においては、授業の学びが保育・教育現場や乳幼児・児童の実像とつながっていることが重要だと考える。そのため、自己の体を通して体験し、感受する力や、相手のことを自分事として捉えて想像力が必要である。①「特別支援教育論」では映像資料（映画の一部、教員自身が収集した動画資料、教材用市販 DVD）を活用し、具体例を見せて理解を促すことで、机上学習においてもできるだけ自分事として感じ考えられるように工夫している（添付資料2）。②模擬体験（ペアワーク）を通して障害による困難さを理解した上で、支援について考える学習活動を設定している（添付資料3）。③「音楽科研究」では講義形式で理論的背景を説明した後、グループワークへ移行する形を取り入れている。グループでイメージを話し合ったり、音を媒体とした表現方法を試行錯誤したりして（思考力や判断力）、音楽表現に結びつけ、発表する（表現力）という学習活動を通して、他のグループの発表を聴くことで、さまざまな発想や表現方法に触れ、アイデアを広げていくことができる（添付資料4）。なお、ほぼ全て授業で ICT を活用し、配布プリントと連動したパワーポイント資料を作成している。

レポートは内容によって紙媒体を用いたり、Google フォーム等を使用したりしている。紙媒体では、よい視点や気づきには朱書きで波線を入れたり、思考を促す質問や新たな観点を書き加えたりして添削して返却している。また、内容によっては、次回の授業の始まりに模範解答を示して解説し、フィードバックを行った（添付資料5）。

4 授業改善の活動

昨年度の授業評価アンケートの結果から検討したことを活用し、授業改善を行っている。特に小学校音楽科の関する授業では、昨年度に残した改善メモを基に授業改善を試み、小学校学習指導要領の求める内容を実践的に理解できるようにした。次年度はその理解をより模擬授業に活かしていけるように工夫したい。

「音楽 I」における弾き歌いの発表では、評価基準をルーブリックで作成し、弾き歌いの技能において目標とすべき基準を示した（添付資料6）。

音楽教育関連の 2 学会、保育関連の学会に所属し、全国大会や支部研修会等や、会員が毎月、主催する音楽教育のオンライン研究会に可能な限り毎回参加して、保育や幼児教育、小学校音楽科教育に関する見識を深めている。（添付資料7）

5 学生の授業評価

2025 年度の授業評価は添付資料のとおりである（添付資料8）。学生の音楽知識・技能の個人差が大きく、基礎的な事項の確認を重視する中でより多くを伝えたいという思いがあり、時間配分に課題が生じた。この結果を踏まえ、2025 年度の授業では学習の重点項目を明確にした上で、協働学習の効果的な方法を検討することで、学生が自らフィードバックを得られる仕組みを構築する。

一定の評価を得られたのは、授業の綿密な計画を立て、映像資料等により理解の促進を図ったためと考えられる。講義科目では、教員の講義が中心になる場合もあるが、可能な部分ではできるだけグループディスカッションなど学生が主体となって考える学習活動を取り入れており、実務家教員として事例や学校の実際など、具体的に伝えることができた。しかし、授業方法の工夫・改善はさらに必要と感じており、学生がなぜこの内容を学ぶのかメタ認知的視点をもって学習に向かうことができるよう授業のねらいや意義を明確に伝えることを行っていきたい。この改善により、学生の達成感と満足度を高めることが期待できる。

6 学生の学修成果

授業方法の工夫は、学生自身が自己を理解し、他者との関係を構築するための基盤を築く上で有益で、学生が異なる考えや価値観を受容し、互いを認めながら振る舞う社会人としての力を培うことに役立っていたと考える。

感性と思考力のバランスの向上: 学生は体験を通じて感性を養い、省察を通じて自己や周囲との関係を理解し、それをもとに新たな考えやアイデアを生み出す思考力が向上し、感性と思考力のバランスよく向上させる。そして、他者との交流から他者への尊重とコミュニケーション能力の向上、模擬体験や映像資料を通じて、実践的な問題への取り組み、解決策を考える力の向上、多様な視野や価値観に触れ、自己の価値観を広げ、共生を意識する姿勢が育まれたと考える。授業評価のコメントで「特別支援学校にとっても興味を持つことができた。障がいがあることで見えてくる視点や様々な考えを持つことができた」という感想が得られている(添付資料9)。

7 授業科目に関連した教材開発

「音楽Ⅰ」では、コード伴奏の学習を支援するため、非常勤講師と協働し、鍵盤の図に手の形のイラストや色、プロンプトとなるキーワードなどの工夫を加え、直感的に学習を進められるように教材を作成した。次年度は、この教材の活用方法について検討し、非常勤講師と共有することで、学習の促進を図っていきたい。また、理論的な側面として、各発達段階における乳幼児の音楽的表現について解説した動画を作成し、予習に活用することで反転学修に役立てている(添付資料10)。現在、次年度に向けて弾き歌い教材の選曲を進めるとともに、効果的な指導法の開発に着手している。

「特別支援教育論」では映像資料を多く活用することにより、実際の学校現場の状況を的確に示し、学生の興味や関心を引き出している(添付資料11)。

8 指導力向上のための取り組み

愛知学泉大学 FD 研修会に参加し、AI の活用を授業にどう活かすことができるか考えることができた。また、日本学校音楽教育実践学会の全国大会や研修会で得た知見をもとに、本学の学生が力をつける授業デザインに向けた着眼点を得ることができた。今後、授業内容に応じた展開方法や質問項目を精査し、より効果的な授業運営を目指したい。さらに、机間巡視による個別対応に手ごたえを感じており、次年度はグループ学習の中に個別対応を組み入れることで、学習効果の向上を図る。

「4 授業改善の活動」で述べたように、学会や研修会に積極的に参加し、研鑽を積んでいる。特に、保育者に関する共同研究で得られた知見を、養成段階における協働性向上に役立て、実践へとつなげていきたい(添付資料12)。

9 今後の目標

短期的な目標は、授業方法の充実である。授業のねらいと学生の着眼点を意識し、課題の明確化と発問を精査するとともに、効果的なアクティブラーニングの方法を検討し、活発な学習活動を計画する。また、理解を促進するために具体的な事例を提示し、学生が自ら学びを深め、解決にたどり着けるよう知識・技能の獲得を促す。さらに、現場の子どもを想定した模擬授業では、獲得した知識・技能をどのように活用し、課題を解決するのかを学生自身が考えられるような課題設定を行う。これにより、将来、保育者や教員となった際に、汎用的な力として発揮できるよう支援しながら、授業改善を図る。

長期的な目標は、短期目標の達成によって学生の学びが充実し、公務員志望者および公務員合格者を増やすことである。同時に、保育者や小学校教員の職業としての魅力を発信することは喫緊の課題であり、学生募集にも直結する。そのため、卒業生や現場との相互交流を深め、現場のリアル——「大変だけど、おもしろい」という実態を追求し、現代的課題の解決に向けた研究(授業研究を含める)を進める。そして、その成果を授業に反映させることで、授業の充実と学びの面白さを実感できる環境を整え、学泉大学での学びをより魅力的なものとしたい。

もう一点の目標は、自分自身のライフワークとなる研究活動の充実である。地域貢献の観点から、音楽療法の知見を活かした子育て支援や保育者支援に関する研究に重点を置き、これを推進していく。

10 添付資料

添付資料1「シラバス」、添付資料2「授業資料」、添付資料3「授業プリント」、添付資料4「授業資料」、添付資料5「リフレクションペーパー」、添付資料6「授業資料」、添付資料7「学会資料」、添付資料8「授業評価アンケート結果」、添付資料9「授業評価アンケート結果」、添付資料10「授業資料」、添付資料11「授業資料」、添付資料12「学会資料」